

宝慶寺世代の法系と末寺の関係

伊 藤 秀 真

一 はじめに

福井県大野市に宝慶寺を開いた寂円禪師（一二〇七～一二九九）は、道元禪師（一二〇〇～一二五三）の示寂後、永平寺二世懐奘（一一九八～一二八〇）の法を嗣いだ。寂円の法

は、宝慶寺二世となる義雲（一二五三～一三三三）に継承された。そして、寂円を派祖とする「寂円派」は、宝慶寺の住持者として、十一世明珊（生卒年不詳）まで嗣続されている。

しかし、それ以降、三十九世大心益成（？～一七八八）まで、宝慶寺の世代に関しては、法脈や師資の関係、行状に不明な点が多い（宝慶寺十四世建綱は寂円派）。この間の宝慶寺世代の主な功績を挙げると、十四世建綱（二四一三～一四六九）は、『宝慶由緒記』を著し、二十八世寂心雲波（一六二六～一六九九）は、七十五巻本『正法眼藏』を謄写し、三十世龍堂即門（？～一七二二）は、義雲の略伝を撰述し、『義雲和尚語録』を編輯した。中世から時代が下ると、伝記類や文書からも、宝慶寺

世代の動向に不詳の部分が多く、あまり行状を叙述することができない。だが、何もなく時代が推移したのではない。寧ろ、学術的に価値を認めることができるような著作が、近世まで伝承していることから、無視することのできない時代とみるべきである。

このように、特に室町時代以後、宝慶寺の世代に関する記述は僅かであり、漠然としている。室町時代以後の宝慶寺の世代の行状を通して、宝慶寺に住持した者について論じたい。

二 宝慶寺の世代と末寺

はじめに、宝慶寺の周辺には、室町時代以後に、宝慶寺の世代を開山とする末寺が建立されていることに着目した。『延享度曹洞宗寺院本末牒』に採録されている宝慶寺の末寺は、記載順に、徳巖寺、曹源寺、光徳寺、阿弥陀寺であり、何れも、福井県内（阿弥陀寺以外は大野市）に所在している。先ず、宝慶寺末寺と所在地、開創年を表にまとめた。

宝慶寺の末寺は、宝慶寺周辺に点在している。開創年については、表に示した通りである。この表には、宝慶寺の末寺であると立証できないが、「宝慶寺寺領目録」にみられる寺院も含めた。目録の内容は、宝慶寺寺領内のことを記している。本多喜禅著『宝慶寺誌』（大野市宝慶寺誌刊行会、一九五八年）に、目録中にみられる寺を、当時あつた宝慶寺の末寺として述べているが、その殆どが現存していない。

宝慶寺と宝慶寺末寺の世代の関係

〔曹源寺〕

開山―⑳柏英以磨、二世―㉑梵芸、三世―㉒晃龍、四世―㉓德嚴慶龍、五世―㉔月心義山、二十五世―㉕仏山戒鱗、二十九世―㉖赤梢龍鱗、三十二世―㉗活水頑龍

〔德嚴寺〕

開山―㉘德嚴慶龍、二世―㉙寂心雲波

〔光徳寺〕

開山―㉚德嚴慶龍、四世―㉛密仙竺三伝、六世―㉜香峯全旭

〔阿弥陀寺〕

開山―㉝養岩快育、三世―㉞龍堂即門、七世―㉟円中碩成、八世―㊱洞岳鐘堂、九世―㊲大心益成、十六世―㊳赤梢龍鱗

〔仏母寺〕

開山―㊴寂心雲波、二世―㊵嚴翁鈎睡、四世―㊶龍堂即門、中興―㊷温海慧珍、七世―㊸仏山戒鱗

〔白蔵庵〕

開山―宝慶開山寂円、再興―㊹枯木吟龍

○内の数字は、宝慶寺の世代を表す。

宝慶寺の末寺は、右のように、宝慶寺住持者がこの各末寺の開山である。各末寺には、開山以降も宝慶寺の住持者が、

宝慶寺世代の法系と末寺の関係（伊 藤）

度々住していることから、本末間の結びつきが、長年、保たれてきたことが窺える。宝慶寺の末寺は、単なる独立した寺院とみるよりも、塔頭寺院のように、草創者の寂後、法孫に宝慶寺末寺の所在地と開創年

寺院名	所在地	開創年（出典は略表記した）
曹源寺	大野市明倫町	天正十三年（一五八五）《大》 慶長六年（一六〇一）《明》 寛永十五年（一六三八）《大》 明暦年間（一六五五〜五八）《明》 十五世紀頃《光》 寛永年間（一六二四〜四四）《縁》 不詳
德嚴寺	大野市明倫町	正保元年（一六四四）《戸》 元禄年間（一六八八〜一七〇四）《寺》 宝永二年（一七〇五）《仏》 文政三年（一八二〇）《戸》 天保二年（一八三一）《白》
光徳寺	大野市木本	不詳
阿弥陀寺	今立郡池田町水海	不詳
仏母寺	勝山市片瀬	不詳
白蔵庵	大野市佐開	白蔵庵の開創は弘長四年（一二六四）※。右記は再興年。
靈雲院	不詳	不詳《朱》※
休岩寺	敦賀市大比田	寛永末年《敦》 『敦賀郡誌』によると、開創の頃は宝慶寺末であつたが、現在は永賞寺末。
平沢寺	大野市平沢領家	不詳《誌》
真善庵	大野市日吉付近カ	不詳《目》
大光寺	大野市黒谷	不詳《目》
了観房	岐阜県揖斐川町カ	不詳《目》
新豊院（庵）	不詳	不詳《目》
知泉坊	大野市御給	不詳《目》
瑞泉庵	不詳	不詳《目》
挑明庵	不詳	不詳《栄》※

《出典》大：「大野市領諸宗寺万年代寺領記」、明：「明細帳」、光：「光徳寺縁起」、緑：「大野市寺社縁起」、朱：「御朱印写当山開基以来請書」（宝慶寺文書）、戸：「戸籍諸事記」（宝慶寺文書）、寺：寺伝による、仏：「仏母寺一件関係書類」（宝慶寺文書）、白：「白蔵庵記」、敦：「敦賀郡誌」（臨川書店、一九八六年）、誌：「宝慶寺誌」（大野市宝慶寺誌刊行会、一九五八年）、目：「宝慶寺寺領目録」（宝慶寺文書）、栄：「建仁栄西千光禪師伝法儀軌」（永平寺史料全書、禅籍編一、二〇〇二年）

※は現存していない寺院。※は塔頭寺院。

よって護持されていたと考えられる。たとえば、曹源寺と仏母寺の両寺には、開山の入滅後を開創年とする説がある。仏母寺では、宝永二年（一七〇五）を開創とする記録に、雲波の弟子本雄を開創者とする説がある。つまり、開山示寂後を開創としても、偽説とは断定できない。即ち、宝慶寺の末寺の建立は、開山の入滅後に開創されたとしても、師を祀るための寺院とすれば、整合性がみられる。嘗て存在していた白蔵庵と雲院については、宝慶寺の塔頭であったことが諸記録に残っている。しかし、宝慶寺の世代が、何代かに互って住持していたという記録は存在していない。宝慶寺の世代が寺院を開創し、その後、宝慶寺の世代が末寺に幾度か晋住したことのある寺院は、現在も宝慶寺の末寺として維持されている。

三 嗣法に依って

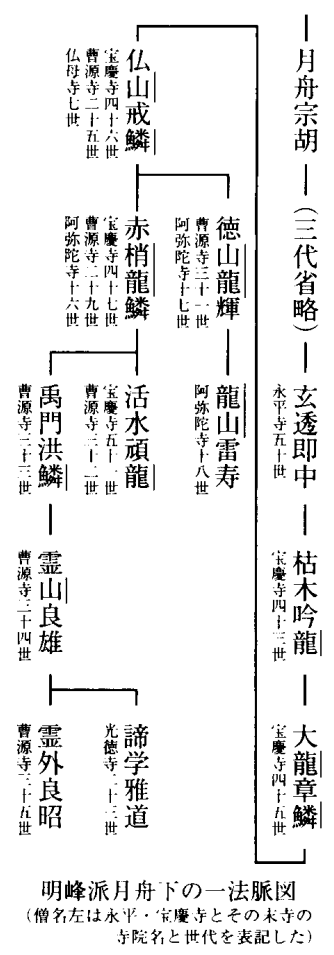
宝慶寺開山寂円が、宝慶寺二世義雲へその法を伝えた。そして、寂円派が展開する。暫く、宝慶寺の世代に寂円の法が次第したと推考されるが、何時まで、寂円派の法脈が宝慶寺世代に嗣続されていたのかは、不明である。

宝慶寺の住持者の法脈について、『曹洞宗全書』大系譜一を基に、法系ごとに世代を配列させて纏めると、次の通りである（○内の数字は宝慶寺世代を表す）。

- ・寂円派 開山寂円↳①明珊、⑭建綱、④〇大椿卍秀、④①建国成寅、⑤③鉄外道光、⑤④徹心良道
- ・寒巖派 ④⑧此郎輔教
- ・瑩山派
 - 明峰派 ④③枯木吟龍、④⑤大龍章麟↳④⑦赤梢龍麟、⑤①活水頑龍
 - 峨山派 —太原派 —如仲派 ⑤⑤真海洋一
 - 通幻派 ④⑨守拙瓶城、⑤②聯道恵光
 - 普濟派 ⑤①白龍天山

宝慶寺の世代は、法系の確証を得られない世代が多くみられる。宝慶寺四十三世枯木吟龍（？〜一八四二）以降、寂円以外の法系であっても、宝慶寺へ晋住したことが把握できる。ここで、禅僧の法諱の文字構成について、取り上げたい。これまでに石川力山氏が、日本達磨宗の場合を例に、特定の系統を示す用字法「系字」（通字）について論じている。^①これをもう少し細分化すると、同世代間の場合を「列系字」、多世代に互る場合を「行系字」といい、師資間で法諱の文字の継承がみられる。

さて、宝慶寺の世代では、吟龍下に、このことが顕著である。明峰素哲（一二七七〜一三五〇）を派祖とする明峰派吟龍下の法脈には、道号か法諱に、共通する字を附して継承し、とりわけ、宝慶寺と宝慶寺末寺に住持していることが分かる。四十三世吟龍から「龍」字が、四十五世大龍章麟（？〜一八六一）から「麟」字が用いられている。吟龍下の行系字は、江戸後期から明治期まで伝わっている。



宝慶寺三十世は龍堂即門、三十八世は普明龍門(？) (一七九六)である。仮に、吟龍以前から、行系字を用いて「龍」字が継承されていたとすれば、更に時代を遡って、明峰派の人物が宝慶寺世代であったと考えることも可能である。しかし、龍堂と普明の嗣承が不明であり、この二師が明峰派の人物であったかどうかは分からない。

『正法眼蔵註解新集』所収の「仏祖正伝授衣鉢作法」には、これが宝慶寺の相承物であったことを意味する、宝慶寺二世義雲から五世義印(生卒年不詳)までの法の継承が、末尾に記されている。また、ここに正徳二年(一七二二)六月二十八日に、龍堂が授与したという内容も附記されている。宝慶寺六世喜雄(生卒年不詳)から二十九世巖翁鈎睡(？) (一七一七)の相伝過程は記されていない。しかし、宝慶寺の相承物として「仏祖正伝授衣鉢作法」が龍堂まで連綿と伝わったとすれば、宝慶寺は、寂円派の法が嗣続されていたと考えられることも可能ではないだろうか。

宝慶寺世代の法系と末寺の関係(伊藤)

四 おわりに

室町時代以後の宝慶寺の世代の行状を解明するにあたり、宝慶寺の末寺と嗣法を中心に論じた。宝慶寺では、世代名が、道号か法諱の二字で伝承されているため、世代名がはっきりしない部分が存在している。

ここで明らかとなった内容を次に纏め、確認をしたい。
 ・宝慶寺の住持者によって、宝慶寺の末寺が開創された。
 末寺開創以降、宝慶寺との結びつきが顕著である。宝慶寺の末寺の開創年は、資料によって相違がみられる。
 ・系字が、宝慶寺四十三世吟龍以前に用いられていたとすれば、明峰派の人物が宝慶寺と宝慶寺の末寺に晋住していたと思われる。一方、義雲から義印まで相伝した「仏祖正伝授衣鉢作法」が宝慶寺の相承物であるならば、宝慶寺六世以降も、寂円の法孫であると推考できる。

室町時代以後の宝慶寺世代は、住持者の法脈に不明な点が残るが、このように、寂円派か明峰派の法を継承した人物が、宝慶寺に入院した時期があったと推察される。

1 石川力山「達磨宗の相承物について」(『宗学研究』二六、一九八四年)一一一〜一二五頁。

〈キーワード〉 宝慶寺、寂円、義雲、曇希、「宝慶寺寺領目録」、「仏祖正伝授衣鉢作法」、系字

(愛知学院大学大学院)